論　文

古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について

――コノハナノサクヤヒメを中心に――

黄　　當　時

〔抄　録〕

古代日本語の船舶の名称には、日本語一視点のみでは正確に理解できないものがある。これらの単語には、適切な海の民の視点、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識を持てば正確に理解できるものがある。

茂在寅男氏は、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、井上夢間氏は、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、ハワイ語を用いて簡潔に説明したが、その知見は、言語面からの研究に突破口を開くものであった。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙（外来語）という視点を加えることで、コノハナノサクヤヒメが「大型船＋労働＋貴婦人」の意味構造であろうことを解明することができた。

古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、外国語、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

キーワード　竹籠、亀甲、無目籠、大目麁籠、コノハナノサクヤヒメ

１．はじめに

コノハナノサクヤヒメは、『古事記』『日本書紀』によると、それぞれ漢字で、木花之佐久夜毘売、木花之開耶姫、と表記される。

この単語は、『日本国語大辞典』（第五巻 p. 976）に次のように説明されている。

> このはなのさくや-びめ【木花開耶姫・木花之佐久夜毘売】記紀などに見える神。大山祇神（おおやまつみのかみ）の娘。磐長姫（いわながひめ）の妹。美しい容姿を天孫瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）に好まれてその妃となり、火酢芹命（ほのすせりのみこと）、火

明命（ほのあかりのみこと）、彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）を生む。神吾田鹿葦津姫（かんあたかしつひめ）。神阿多都比売（かんあたつひめ）。このはなさくやびめ。

『大辭典』（第11巻 p. 208）は、次のように説明している[101)]。

コノハナノサクヤヒメ　木花之佐久夜毘賣・木花開耶姫　大山祇神の女。瓊々杵尊の妃。一名、鹿葦津姫（かあしつひめ）・神吾田津姫（かむあたつひめ）。木花は櫻花のこと、開耶は開光映（さきはや）にて咲き匂ふこと。卽ち櫻花の光（て）り映（は）ゆる如く麗しき女神の意。記・上「木花之佐久夜毘賣」神代紀「時彼國有美人、名曰鹿葦津姫、（亦名木花開耶姫）、……美人對曰、妾是大山祇神所生兒也、皇孫因而幸之……生火闌降命・彦火々出見尊・火明命」

『日本国語大辞典』は、コノハナノサクヤヒメという名前の由来や意味については説明がない。一方、『大辭典』は大胆な説明をしているが、文字表記にすがっただけの説明ではないか、説明とも言えないのではないか、と思われるような説明をしている。

この人物にこの名前が付けられた頃に用いられていた言語は、恐らく、忘れ(去)られたであろうが、この名称に失われた言語の痕跡が残されている可能性は、ないのであろうか。古代日本語の船舶の名称には、いわゆる日本語一視点のみでは正確に理解できないものがあるが、この人物の名前が船舶の名称に由来する可能性は、ないのであろうか。

海の経験の乏しい私たちには、この問題について判断する能力や知識が欠けているかも知れないが、私たちの視点を、いわゆる海の民の視点にもう少しでも近づけることができさえすれば、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識は、入手可能ではないだろうか。いわゆる海の民の視点とは、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識ということになろう。小論では、管見に入った有用な知見を手掛かりに、必要にして十分な程度の知識を入手しつつ、言語学的視点からコノハナノサクヤヒメという名前の由来を探ってみたい。

2．先行研究

古代日本語における船舶の名称については、言語学的視点からの研究は貧弱で見るべきものがほとんどないが、二人の研究者が「枯野」解明の過程で示した知見が有用と思われるので、見ておきたい。

先ず、茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『記』『紀』の物語が成立した頃は、ある種の高速船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたので、その当て字として「枯野」(『古事記』)、「枯野、軽野」(『日本書紀』) が使われたのではないか、と推論してい

る[201]。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後にカリブ海の原住民から伝えられたアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。そして、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった[202]。その説は、重要な問題提起ではあったが、それ以上の知見が出てこなければ、面白い考えだ、で終わってしまうものであった。

次いで、井上夢間氏は[203]、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、種々の事例を紹介しつつ、基本的で重要なことがらを次のように簡潔に説明している[204]。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌーは、一般的にはハワイ語で「ワア、WAA」と呼ばれます（ハワイ語よりも古い時期に原ポリネシア語から分かれて変化したとされるサモア語では「ヴア、VA’A」、ハワイ語よりも新しい時期に原ポリネシア語から分かれたが、その後変化が停止したと考えられるマオリ語では「ワカ、WAKA」）。しかし、カヌーをその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」（マオリ語では、タウルア、TAURUA）と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、「かるの」は、ハワイ語の

「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI（kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、「大きな・帆をもつ・カヌー」

「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI（kaulua = double canoe; nui = large)、「大きな・双胴のカヌー」の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の

「カウ・ヌイ」

KAU-NUI（kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、「大きな・カヌー」の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の解明は、言語学的視点からの研究に突破口を開くものであった。氏の画期的な知見により、私たちは、言語学的な根拠を持って古代日本語における船舶の名称について考察することができるようになったのである。氏の知見が私たちの研究の新たな礎となることは、間違いない。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明に極めて重要な視点/手掛かりであり、今後の研究に大きく寄与することであろう。

３.『万葉集』の船名

寺川真知夫氏は、『万葉集』の一部の船について、次のように簡潔にまとめている[301]。

……『万葉集』の巻二十に伊豆手夫禰（四三三六）、伊豆手乃船（四四六〇）と二例伊豆国産の船が詠まれており、奈良時代中期には大阪湾に回航され、使用されていたことが知られる。その船は伊豆手船すなわち伊豆風の船と呼ばれているから、熊野船（巻十二、三一七二）、真熊野之船（巻六、九四四）、真熊野之小船（巻六、一〇三三）、安之我良乎夫禰（巻十四、三三六七）などと同じく、何らかの外見上の特徴を有する船であったに違いない。この四三三六の歌では「防人の堀江こぎつる伊豆手夫禰」とあるから、これを防人の輸送と解し得るなら、その特徴は大量輸送の可能な大型船ではなかったかと思われる。

ここで、井上氏の説くところを手掛かりにして、さらに考察を加えてみたい。

先ず、「伊豆手夫祢」[302]と「伊豆手乃船」[303]であるが、（四三三六）と（四四六〇）の歌は、次の通りである。

巻第二十（四三三六）
防人の　堀江漕ぎ出る　伊豆手（て）船　梶取る間なく　恋は繁けむ[304]
巻第二十（四四六〇）
堀江漕ぐ　伊豆手（て）の舟の　梶つくめ　音しば立ちぬ　水脈速みかも[305]

外来語を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意訳の二つの方法がある。中国語では、どちらも漢字で表記するが、音訳してみたもののわかりにくいかもしれない、と考えられる場合、

さらに類名を加えてわかりやすくすることがある。特に、音節数が少ないものは、よりわかりやすく安定したものにするために、この手法が採られることが多い。

例えば、beer や card という単語は、「啤」や「卡」という訳で、一応、事足りており、特に単語の一部であれば、問題はない（例：扎啤、〔ジョッキに入れた〕生ビール；信用卡、クレジットカード）。ところが、「啤」や「卡」だけで一つの独立した単語となると、やはりわかりにくさは否めない。そこで、類名の「酒」や「片」を加えて、「啤酒」や「卡片」とするのである。

このような、現代中国語に見られる「外来語＋類名」という表記法は、古代日本語に既に存在している。「手」や「手乃」という訳で、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「夫祢」や「舟」という類名を加えて、「手夫祢」や「手乃舟」としたのである。

歌人が見たものは、どちらも、「手乃」と呼ばれる船である。表記の違いは、（四四六〇）では、「手乃」をそのまま使うことができたが、（四三三六）では、音節数の制約によりやむなく一文字省略せざるをえなかった、ということから生じている。そして、歌人は、一文字省略するに当たって、前置要素「手」を略して後置要素「乃」を残したのではなく、後置要素「乃」を略して前置要素「手」を残したのである。

もちろん、逆に、（四三三六）で「手」と詠まれた船を、（四四六〇）では二音節で詠むために、「手」に「乃」を後置して「手乃」とした、と見なしても一向に差し支えない。

いずれの見方をするにせよ、意味は取れなくとも、修飾語を被修飾語の後に置くという、表層の日本語には見られない語法構造であることは見て取れる。なお、「手（て）」は、その頃の日本語の実相がわからないまま訓（よ）みを一つ当てただけであって、歌人が「手（た）」と詠んでいた可能性を排除することはできない。「手」には、た行音の場合、「た」と「て」の二音があり、実際のところ、時代差や地域差さらには個人差により「た」が用いられたり「て」が用いられたりしていた、と考えてよい。

次は、「熊野舟」[306]、「真熊野之船」[307]、「真熊野之小船」[308]であるが、（三一七二）、（〇九四四）、（一〇三三）の歌は、次の通りである。

巻第十二（三一七二）

浦廻漕ぐ　熊野船着き　めづらしく　かけて偲はぬ　月も日もなし[309]

巻第六（〇九四四）

島隠り　我が漕ぎ来れば　ともしかも　大和へ上る　ま熊野の船[310]

巻第六（一〇三三）

御食つ国　志摩の海人ならし　ま熊野の　小（を）船に乗りて　沖辺漕ぐ見ゆ[311]

この三つの船名は、ある同じタイプの船を指している、と考えられる。つまり、（一〇三三）

の「小船」は、「小」という情報を明示しており、（〇九四四）の「船」と（三一七二）の「舟」は、音節数の制約により「小」を略してはいるが、（一〇三三）の「小船」と同じもの、と理解してよい。

最後は、「安之我良乎夫祢」[312]であるが、（三三六七）の歌は、次の通りである。

巻十四（三三六七）
百つ島　足柄小舟（を）　あるき多み　目こそ離るらめ　心は思へど[313]

先の例と同じく、これらの単語も「異文化の語彙（外来語）＋類名」という表記法で書き記されている。「小」や「乎」と訳して、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「船」や「夫祢」という類名を加えて、「小船」や「乎夫祢」としたのである。

歌人はある船を「を」と詠み「小/乎」と書き記した、と考えるのみでは、重大な事実誤認をする可能性がある。歌人がある船を「こ」と詠み「小/乎」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、このケースではむしろ高いのではないだろうか。

後人は、いわゆる海の民の言語や文化についての知識を欠くために、「小（こ）船」や「乎（こ）夫祢」の正確な意味がわからず[314]、「小/乎」を接頭語か形容詞と誤解して「を」と訓んだが、熊野の「小（こ）船」と足柄の「乎（こ）夫祢」は、ともに「こぶね」と詠まれたものを書き記した可能性があるのではないのだろうか。

この文字表記から確実に言えることは、「小/乎」は「を」か「こ」を書き記した（「を」か「こ」の音声を示している）ということだけである。「小/乎」の訓みは「を」一音しかない、と考えるのは、無邪気に過ぎるが、「小（こ）/乎（こ）」は、考え得る訓みの一つであるのみならず、古代日本語の船舶の名称を研究する上で極めて重要な意味を持っている。研究者は、「こ」と呼ばれた船が存在した可能性がありそうだ、という認識を頭の片隅に置くとよい。

漢字は、形音義の三要素からなるが、表意文字と分類されるように、表意機能が強いため、漢字が理解できる者が、漢字の字形が示唆する意味を考慮せずに情報を解析することは、一般に、容易ではない。この問題もそうだが、漢字が表音に用いられている（ことを見抜かねばならない）ケースでも、字形が示唆する意味で解け（た気分になれ）れば、思考がそこで停止する。その結果、漢字表記が行われる以前の日本語の実相を見誤ることが間々生じるのである。

歌人は、「小」や「乎」を表音に用いたのであり、表義に用いたのではない、と考えてよい。（三三六七）の原文のように、「乎夫祢」と表記されていれば、字面から舟/船の大きさを連想することはない。ところが、「小舟」と表記されていると、当て字に過ぎないということがわかっていればよいが、人々が、つい、字形に引かれて、単に「サイズが小さい船」と取ってしまっても無理はない。語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことがあっても、漢字の絶大な表意力の前に、「小」と書いてあるから小さいと考えるしかない、と不審の思いを喪

失してしまうのである。

それでは、「手」、「手乃」と「小/乎」は、いずれも船を意味する異文化の語彙（外来語）を音訳したものということになるが、一体どのような言葉に由来するのであろうか。先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「手」は「tau」を、「手乃」は「tau-nui」を、そして、「小/乎」は、「kau」を書き記したものであろう。

大型のカヌーと言いたければ、確かに、「手乃（tau-nui）」が正確な表現である。しかし、実際には、寺川真知夫1980が、大量輸送の可能な大型船ではなかったか、と推測するように（p. 142）、（四三三六）の「手（tau）」は（四四六〇）の「手乃（tau-nui）」と同じ大型船を意味しており、大きいことを明言する場合を除き、「手（tau）」だけでカヌー一般を指したはずである。それは、今日、カヌーという言葉が大小を問わずに使えるのと同じような状況である。このことは、「小/乎（kau）」についても同様であった、と考えられる。

言語現象として、伊豆では「手（tau）」が使われ、熊野や足柄では「小/乎（kau）」が使われていることは、注目に値する。それは、伊豆にはカヌーを「手（tau）」と呼ぶ人々が、そして、熊野や足柄にはカヌーを「小/乎（kau）」と呼ぶ人々がいたということを示しているからである。

これで、古代の日本の船舶には、修飾語の「nui、野/乃」を付す大型のもの（kaulua-nui、加良奴/加良怒/枯野/軽野；kau-nui、狩野[315]；tau-nui、手乃[316]）と、「nui」を付さず、大型のものから小型のものまで幅広く使用できるもの（tau、手；kau、小/乎）があったことがわかる[317]。

４．亀甲

『古事記』（中巻、神武天皇）に、「故、従其国上幸之時、乗亀甲為釣乍打羽挙来人、遇于速吸門」という記述がある。

この一文は、一般に、「そして、その国から上っていらっしゃった時に、亀の背に乗って釣りをしながら袖を振って来る人に、速吸門で出会った」[401]、「そして、さらにその国からお上りになった時、亀の甲に乗って釣をしながら左右の袖をはばたいて来る人に、潮流の速い海峡の速吸門でお会いになった」[402]と口語訳されている。

この物語は、『日本書紀』（巻第三、神武天皇、即位前紀）にも登場する。

原文は、「天皇親帥諸皇子・舟師東征。至速吸之門。時有一漁人、乗艇而至」であり、「天皇は自ら諸皇子・舟軍を率いて、東征の途に就かれた。速吸之門に着かれた時に、一人の漁師がいて、小舟に乗って近づいて来た」と口語訳されている[403]。

『古事記』の「亀甲」は、『日本書紀』では「艇」と記述されているが、両者は同じものである、と考えてよい。にもかかわらず、これまでは、『古事記』の「亀甲」を、例えば、「亀の

背」や「亀の甲」と解釈し、『日本書紀』の「艇」を、例えば、「小舟」と解釈してきた。両者の意味に乖離があることには気付いていても、手の付けようがなかったのである。

『日本書紀』の「艇」が船舶という情報を伝えていることは、紛れがない。『古事記』の「亀甲」と、『日本書紀』の「艇」とが同じものである以上、「亀甲」は、決して、亀あるいは亀の背ではなく、船舶なのである。つまり、「亀甲」という船なのである。

先に、井上氏の知見を紹介した際に、カヌーを、ハワイ語でカウ（kau）と呼び、マオリ語でタウ（tau）と呼ぶ、と述べた。そして、古代日本語において、kau は、『万葉集』では、「小(コ)/乎(コ)」と訳されるが、訳語の表記が一文字で、読みも一音であり、わかりにくく不安定である。そこで、よりわかりやすく安定したものにするために、類名を加えて、「小船」や「乎夫祢」と表記されている、と述べた。

「甲(コウ)」は、「小(コ)/乎(コ)」とやや異なり、長音で、類名を付さないが、その意味は、もうおわかりであろう。kau は、『古事記』のこの物語では、「亀＋甲」という形式で、複音節語の後部に置かれている。言わば、「亀カヌー」というような表記である。

『古事記』の「亀甲(コウ)」が船であることは、自明である。加えて、『日本書紀』も「艇」という情報で船であることを明示している[404)]。『記』『紀』ともに、船であることを明示しているにもかかわらず、人々は、海の民の言語や文化についての知識を欠くために、「亀甲」を船に解釈することがどうしてもできなかった。

『日本書紀』（神代下、第十段、一書第一）の竹籠(たけのこ)という単語は、情報がやや重複する形ながら、「堅間」を竹製の籠(コ)（kau）とはっきり説明したものである。籠という漢字は、龍に竹冠を付したものである。海の民は、船を龍と見なし、船を龍舟や龍船、さらには、略して龍と言うことがある。龍は、本来は想像上の動物である。そのため、『日本書紀』の編纂者は、想像上の動物という意味を排除しつつも、龍（舟/船）という情報を伝えられる好個の漢字として、籠を使用したのである。籠(コ)は、語部の提供したコ（kau）という音声情報と、竹製の龍（舟/船）という意味情報とを伝達できる表記であるが、『日本書紀』の編纂者の漢字に対する造詣の深さには改めて驚きを禁じえない。

『日本書紀』（神代下、第十段、正文）にも、無目籠、という船があり、「籠」は、古訓はカタマであるが、コとも訓む。小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、「所謂堅間は、是今の竹籠(たけのこ)なり」を引いて、「カタマは竹籠(たけかご)の意である」と説明するが（p. 156頭注8）、「竹籠(たけのこ)」を「竹籠(たけかご)」と言い換えるのは、間違っている。両者は、名称も異なり形状も異なる全くの別物である。「竹籠(たけのこ)」の訓注が理解できないのは、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏に限ったことではないが、言い換えるのであれば、竹籠(たけのこ)とは、竹籠(たけのコ)の意である、とすべきであった。

『古事記』の編纂者は、なぜ、わざわざ訓注を施したのであろうか。それは、籠(かご)と読まれることを危惧したからである。そして、籠(かご)では、読みが違うのみならず意味も違い理解不能とな

るからである。

訓注は、私たちに理解できなくとも、重要な情報を提供している可能性が高く、よほどの根拠を提示しない限り、無視するものではない。理解できない場合には、ペンディング、とすればよい。このような難問を扱う際、解決を棚上げする知恵が必要である。このケースで言えば、籠（こ）と籠（かご）との間に等号を引くことは、思いとどまるべきであったが、これで、私たちが「竹籠（たけのこ）」の解釈に悪戦苦闘することは、もはやない。

以上の通り、古代日本語において、kau は、後に類名が続く場合には「小（コ）/乎（コ）」と表記され、単語の末尾に置かれる場合には「甲（コウ）/籠（コ）」と表記されていることがわかった。そして、亀甲が、亀の甲（コウ）（kau）、言わば、亀のカヌー、であることがわかった。

亀は、船舶の一部と見なすには、異質な要素であるが、亀の甲（コウ）（kau）という船とは、一体どのような船なのであろうか。

情報には、一般に、目で受容するもの（以下、視覚情報）と耳で受容するもの（以下、音声情報）の二種がある[405]。時空を越えた情報の伝達には、電話やテープレコーダがない時代にあっては、視覚情報を使うしかないが、視覚情報は、さらに、文字情報と非文字情報（図像や造形など）に大きく分けられ、文字がなかった頃は、非文字情報が利用された。

唐古（からこ）・鍵（かぎ）遺跡（奈良県磯城郡田原本町）の弥生土器の線刻舟の前方には鳥が描かれている。東殿塚（ひがしとのづか）古墳（奈良県天理市）の円筒埴輪には、三隻の大型船の線刻画が描かれ、２号船は、舳先に鳥が描かれている。珍敷塚（めずらしつか）古墳（福岡県うきは市）の壁画には、舳先に鳥が大きく描かれている。

古代の日本において、一部の情報は、非文字情報と音声情報の二種の媒体で伝達されている。このケースで言えば、人々は鳥を船に乗せて航海した、という情報が、土器や壁画に彫られた非文字情報と、語部によって代々引き継がれ、後に『記』『紀』などの文字情報に変換された音声情報に共通して保存されているのである。

非文字情報と、後に文字情報に変換された音声情報に共通する情報は、人々は鳥を船に乗せて航海した、ということである。そして、船名を構成する動物は、鳥である。そうすると、この亀は、鳥と解析するしかない。つまり、私たちにとって、亀とは、通常、爬虫類の亀であって鳥類の亀を意味することはないが、古代日本語ではある種の鳥を亀と呼んでいた、と解析せざるをえない。

古代人が鳥を亀と呼んだ例は、他にも存在するのであろうか。

例えば、古代英語では、turtle は、turtledove の一般的な略称であった[406]。

“Turtle” was a common archaic English shortening of the name “turtledove.”

turtledove は、通常、キジバトと訳されるが[407]、小論では、亀鴿と訳しておく。そうする

と、全称の turtledove/亀鴿を上略した形が dove/鴿で、下略した形が turtle/亀であることが容易に見て取れる。亀鴿は、考察の便宜のため試みに訳したものであるが、古代日本語には、上略した形の鴿や、下略した形の亀が存在したのみならず[408]、全称の亀鴿も存在したのではないだろうか。ハワイ語には、kuhukukū という単語があり、鴿もしくは亀鴿を意味する（kuhukukū．n. Dove, turtledove）[409]。kuhukukū が、turtle と訳された例を挙げておく[410]。

The voice of the turtle, (archaic for turtledove), ka leo o ke kuhukukū.

茂在氏が述べる通り、海の民は、外洋航海で、目標の陸地や島が視界に入ってこない場合に、あらかじめ船に乗せておいた鳥（特に、ハトやカラスなどの陸鳥）を飛ばすのである。鳥が飛び去るなら、その方向に陸地や島があることがわかり、船に戻って来るようであれば、近くには陸地や島がないことがわかる。

外洋船に鳥を積み込むことは、乗員が生きて再び土を踏むことができるかどうかにかかわる極めて重要な行為であった。その重要度の高さは、鳥の舶載が非文字情報と音声情報（後の文字情報）の二種の媒体に登場することからも窺い知ることができる。

5．無目籠

海幸彦・山幸彦の説話の中に、山幸彦が釣針をなくして海岸で泣いていた時に、シホツチの老翁が来て、ある船を造り、ワタツミの宮に行かせる場面がある。

ある船とは、「無目籠」（『日本書紀』神代下、第十段、正文）[501]のことであるが、『日本書紀』では、「無目堅間」（神代下、第十段、一書第一）[502]とも表記され、『古事記』（上巻）では、「无間勝間之小船」[503]、「無間勝間之小船」[504]と表記されている。そして、これら四者（以下、姉妹船）以外に、さらに一つ、「大目麁籠」（『日本書紀』神代下、第十段、一書第一）[505]という名称も持っている。

個々の姉妹船は、一見、難解であるが、体系的に見ていくと、それぞれの船名や付随する記述から、それなりに筋が通った情報が読み取れる。考察の便宜上、姉妹船をひとまず「無目籠（かたま）之小船」の一語に括っておきたい。

書かれた時点では、書かれた内容は理解できたはずであるが、後人は、書かれた内容が理解できないため、「無目籠（かたま）之小船」の解釈に長く苦しんできた。この言葉は、一般に、次のように説明されている。

竹で固く編んだ、すきまのない小舟[506]。
隙間のない竹の籠（かご）[507]。

隙間なく竹を編んだ小さな籠（かご）の船[508]。

密に編んだ隙間のない籠（かご）[509]。

籠は、所詮、籠である。竹籠にどう手を加えたところで、大海へ乗り出すには貧弱すぎる。古代の旅は、身分の高い者にとっても決して楽なものではなかったが、山幸彦は、この船旅でどのような船舶を利用したのであろうか。山幸彦の遠出のためにわざわざ造ったのであれば、籠（かご）などではありえない、と見るべきであろう。

茂在氏は、次のように述べる[510]。

……無目堅間小舟……は御存知であろう。……在来は目つぶしをした籠の舟と訳しているこの船。無目は水密なと訳しても良いが、その後を私は次のように考える。

カタマランを、元の響きを残して日本語に訳せといったら、「カタマ小舟」と訳すのは無理な話であろうか。私は「堅間小舟」は文字に意味があるのではなくて、発音に対する当て字が使われたのだと解釈する。……もっともカタマランとはタミール語である。カタとは「結ぶ」マランとは「木」で、筏のことも双胴船のこともカタマランと呼んでいたのには数千年の歴史がある。

茂在氏の着想は、鋭い。氏の主張には、耳を傾けるべきところが多々あるが、特に、字面にとらわれない解釈を提案したことは、重要である。氏が、「籠（かたま）」を、カタマランの音訳である、と看破したことは、画期的であり、その功績は大きい。しかしながら、「無目」を、水密な、と解釈したことは、従来の解釈の域を出るものではない。水密でない船は、水上の乗り物としては不適当である。『記』『紀』は、どの船にも求められている必須条件にわざわざ言及しているわけではない。この「無目」は、文字通り、「目がない」という意味なのである。

中国語では、龍の装飾があるものを、龍と言うことがある[511]。龍舟節/龍船節で使用する船には龍の装飾が施され、今日、一般には、龍舟/龍船と言うが、単に龍と言ってもよい。例えば、唐の薛逢の詩「観競渡」に、「鼓聲三下紅旗開，兩龍躍出浮水來」とあるが、この龍は、龍舟/龍船のことである[512]。

苗族の文化では、船は龍に同じ、と考えられている。

このような、船を龍と同一視する考え方は、例えば、浙江省の舟山（杭州湾）地区にも見られる。ここで、この地区の漁船について書かれた文章を一つ見ておきたい[513]。

长江口外东海杭州湾一带，是中华古国最早出现海上渔船的海域之一。现今概念上的嵊泗渔场，正是处于这片江海交汇丰饶大海域的最佳区位上。……据考古，上古时期的吴越风俗由海洋传播至嵊泗列岛。由此推断，最早出现在杭州湾外长江入海口之嵊泗海域上的，当是

独木渔舟。……在相当长一个时期内，这种独木舟式的渔船之船头两侧没有船眼装饰，因此渔民唤之为“无眼龙头”。

船の舳先は、船頭と言い、龍舟/龍船の場合には龍頭という言い方があるが、普通の船でも龍頭と言うことがある。舟山（杭州湾）地区では、長期にわたり、丸木舟形式の漁船の舳先（船頭、龍頭）の両側には船眼（船の眼、マタノタタラ）の装飾がなく、漁民はそれを「無眼龍頭」と呼んでいた。この地区の漁民は、船を龍と見なす祖先の文化を継承してきたのである。

舟山（杭州湾）地区の漁民が使う「無眼龍頭」。この単語が、「無目籠」が船眼の装飾のない船であることを私たちに教えてくれている。

『記』『紀』の物語が成立した頃の日本にも、船を龍と見なす人々、船眼の装飾がない船を「無目龍」と呼ぶ人々がいたのではないか。少なくとも、その頃の日本人がそのような文化や語彙が世の中にあることを知っていたことは、間違いない。

では、「無目龍」は、なぜ、「無目籠」と表記されたのであろうか。

龍は、想像上の動物である。「無目龍」という表記をそのまま採用すると、人間が人間に作れるはずのない龍を作ることになり（作無目龍）、合理的ではないと考えられたのであろう。『日本書紀』（神代下、第十段、一書第一）には、さらに、竹を取って大目麁籠を作った、とあるので、籠は、龍と竹の二つの情報を伝える好個の文字と考えられたのではないか。

「無目籠之小船」は、意味のよくわからない「無目籠」に、よく知られている「小船」を後置して意味説明を補足する形式を取っている。

茂在氏は、上に引用した通り、カタマランは「カタマ小舟」と訳せる、と言う。全体像の捕捉という点で問題はないが、正確ではない。この着想で訳すなら、カタマランは、「カタマ船（勝間船/堅間船/籠船）」となるからである。

先に、異文化の語彙（外来語）を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意訳の二つの方法があり、音訳では、さらに類名を加えてわかりやすくすることがある、と述べた。そして、beer や card は「啤酒」や「卡片」である、と例示した。泡があるとか、小さいとかいう要素を類名に持たせることはないので、いくら泡があったり、小さかったりしても、「啤酒」や「卡片」が、「啤泡酒」や「卡小片」となることはない。「之」を介していることからもわかるように、「無目籠之小船」の「小船」は、類名ではないのである。

シホツチの老翁は、第三者がその小ささに言及せねばならないほど、明らかに形状が小さい船をわざわざ作って山幸彦に提供したわけではない。この「小船」が、決して、小さい船という単純な意味で使われているのではないことは、もうおわかりであろう。「小船」は、ここでは、「コ（kau）と呼ばれる船」のことであり、すでに検討した通りである。

さて、「無目籠之小船」は、考察の便宜のために創作した仮の言葉である。以上のように、

おおよその意味が取れたので、ここで、この一語に括る前の、個々の表記の出入りも検討しておきたい。

姉妹船の表記を見る限りでは、『古事記』には「之小船」が付され、『日本書紀』にはそれがない。しかしながら、実は、語部（集団）の言うカタマは補足説明なしにはもはや理解が難しかろう、という危惧は、『古事記』と『日本書紀』の記述に共通して見られる。『古事記』の編纂者は、「无間勝間/無間勝間」の直後に「之小船」を付すことで、『日本書紀』の編纂者は、文末の「一云」で「是今之竹籠」と述べることで[514]、意味説明を補っている。両者は、表現の手法や用いた漢字こそ異なるが、伝えようとする情報には違いがない。どちらも、カタマが今の言葉で言うコ（kau）に相当する船であることを伝えている。

異文化の語彙（外来語）は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。『記』『紀』における「勝間」と「堅間」の揺れは、元の表記をそのまま採用しなかった（あるいはできなかった）ために生じている。『記』『紀』がそうしなかった（あるいはできなかった）のは、その単語が漢字以外の文字で表記されていたか、文字表記そのものがなかったか、のどちらかである。先に、「小船」が何であるのかを見たが、「小」と「乎」の揺れ、さらには、「籠」の揺れも、同じ理由によるものである。

「無目」には、「无間/無間」と「無目」のバリエーションがあるが、いずれも、動賓（ＶＯ）構造である。この構造は、この表現が、音声を表記したものではなく、意味を表記していることを示している。言い換えれば、「マナシ/まなし」という音声ではなく、「マ/まがない、マ/まを持たない」[515]という意味を表記しているのである。

残るは、「間」と「目」の出入りであるが、表記に違いはあるものの、伝えようとする情報には違いがない。「間」と「目」は、ともに「目/眼」のことである。

同一情報の記録に同一表記を用いる手法ほど単純明快なものはない。『古事記』の編纂者は、語部（集団）の言う二つの「マ」（音声情報）を二つの「間」（文字情報）で書き記したが（无間勝間/無間勝間）、後人は、二つの「間」が二つの「マ」を意味することを見て取ることもできず、例えば、前の「間」は「ま」を意味し後の「間」は「マ」を意味する、と誤解したりした（无間勝間/無間勝間）。」

答は、既に出ているので、お気付きかも知れない。先に、船には船眼（船の眼、マタノタタラ）の装飾を施さないものがある、と述べた。『古事記』は、「マタノタタラ」という音声情報（異文化の語彙、外来語）を「間」と書き記し、『日本書紀』は、「船の眼」という意味情報を「目」と書き記したのである[516]。

以上を踏まえて解釈すれば、「無目籠之小船」の意味は、次のようになろう。

「舳先に船眼（マタノタタラ）の装飾のないカタマランという船で、ある文化圏では無目龍と呼ばれ、船材に竹を使っているが[517]、今の日本語では、外来語のコと組み合わせて、通常、コぶねと呼んでいるものに相当する船」である。

「無目籠（カタマ）之小（コ）船」一語に、これほどの情報が織り込まれているのである。『記』『紀』の編纂者は、語部（集団）の提供する情報を該博な知識で記録・編集したが、海の民の言語や文化に関する知識は、その後、急速に失われ、後世の人々は、同じ知識を共有しないため、書かれたことを理解することもできない。周辺諸語の知識なく、いわゆる日本語一視点のみの知識で、このような語彙に立ち向かうものではない[518]。

「一云」に始まる文章は、僅か33文字であるが、提供する情報の質の高さは、秀逸である。

渡航用船舶として、舳先に船眼（マタノタタラ）の装飾のないカタマランが準備されたこと、カタマランは、ある文化圏では龍と呼ばれ、船材に竹を用いていること、落水に備えた命綱は、火火出見尊には船上で動きやすいように他の乗員よりも細めのものが使用されたこと、尊の命綱は、本人ではなく他人がしっかりと装着したこと、装着確認後に出航しており、発航前点検がきちんとなされたこと、一行に対する見送りは、船影が水平線の下に消えるまでの鄭重なものであったこと、そして、この物語に登場するカタマランという船は、今で言う、竹のコ（kau）に相当すること、などが読み取れる。ポイントを押さえた、正確で詳細な内容には、驚きを禁じえない。

６．コノハナノサクヤヒメ

コノハナノサクヤヒメは、漢字で、木花之佐久夜毘売、と表記されたり、木花開耶姫、と表記されたりしている。

異文化の語彙（外来語）は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。

この人名に見られる表記の揺れは、この人名が元々漢字以外の文字で表記されていたか、文字表記そのものがなかったか、のいずれかであることを示唆していよう。

木花之佐久夜毘売、であれ、木花開耶姫、であれ、コノハナノサクヤヒメという音声情報に当て字をしたものと見てよいのではないか。上述の通り、『大辭典』の説明は漢字表記にすがったものであり、事実や証拠に裏付けられた説明ではないように見受けられるが、いかがであろうか。

人々は、木花の二文字を見て、それは樹木の花、それは桜（もしくは梅）、と推測したのであろうが、解決を焦るあまり、自身の頭脳が普通に考えていないことにすら気付けなかったのであろう。気の毒と言うしかないが、女子の名に桜（もしくは梅）を想定した名付け人が桜（もしくは梅）を捨てて木花に走ることなどないのである。

サクヤヒメは、恐らく、haku wahine（貴婦人）が口伝の過程で劣化したものではないか[601]。

haku wahine. n. Wife of a chief, lady, woman of high rank; female employer or supervisor.

コノは、これまで見てきた通り、kau-nui（船-大きい）のことであろう。この人物は、大型船と何かの関わりがあってこのような名前が付いたのではないだろうか。

『日本書紀』（神代下、第九段、一書第六）には、以下のような記述がある[602)]。

天孫又問曰、其於秀起浪穂之上、起八尋殿、而手玉玲瓏織紝之少女者、是誰之子女耶。答曰、大山祇神之女等、大号磐長姫、少号木花開耶姫。亦号豊吾田津姫。云云。

ハナは、hana（1．nvt. Work, labor, job, employment, occupation, ...）[603)]のことではないか。よく働いたのでこのような名前がついたのではないか[604)605)]。

７．おわりに

コノハナノサクヤヒメは、適切な海の民の視点を欠いたままでは、文字表記にすがる理解しかできない。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙（外来語）という視点を加えることで、コノハナノサクヤヒメが「大型船＋労働＋貴婦人」の意味構造であろうことを解明することができた。

古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、外国語、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

〔注〕

101)引用の際の省略個所は、……、で示す。以下同じ。

201)『古事記』（下巻、仁徳天皇）の原文表記は、加良奴（荻原浅男、鴻巣隼雄1973．p. 289)、加良怒（山口佳紀、神野志隆光1997．p. 304)。

202)茂在寅男1984．p. 32。
「枯野」等の解釈に外来語（異文化の語彙）という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。

203)筆名。本名、政行。

204)KAMAKURA　OUTRIGGER　CLUB、http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html. Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC.
これは、管見に入った最も有用な知見である。
井上氏は、ここでは慎重に、kau ＝ to place, to set, rest ＝ canoe と説明しているが、自身の HP（夢間草廬、http://www.iris.dti.ne.jp/～muken/）では、kau = canoe としている。
Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986には、「kaukahi. n. Canoe with a single outrigger float」(p. 135)、「kaulua. nvi. Double canoe」(p. 137) の例があるので、kau を

canoe と理解するのに問題はない。修飾語がなくとも、「kau」だけで使われていたであろう。

301）寺川真知夫1980．pp. 141-142。

302）小島憲之、木下正俊、東野治之1996．p. 390の原文表記。

寺川真知夫1980．p. 142は、引用の通り、大型船か、と推測する。正しい推測である。

303）小島憲之、木下正俊、東野治之1996．p. 437の原文表記。

なお、同頁には、「歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる」と頭注を付している。小島憲之、木下正俊、東野治之諸氏は、窮余の策をとったのであろうが、歌の趣では、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤りではないものの、研究方法として許容されない。

後述するが、文字表記に基づくなら、「手乃」は「手」よりも大きいので、小島憲之、木下正俊、東野治之諸氏は、逆に解釈をしてしまっている。趣は、主観的要素に左右される余地が大きく、基準として使えないことが改めてはっきりした。趣は、個々人で異なるものであり、趣ではなく、言語に依拠することが望ましい。日本語一視点で解こうとする思考に傾きがちな研究者の意識改革が待たれる。

304）小島憲之他校注1996、p.390は、次のような頭注を付している。

伊豆手船―伊豆地方で建造された船をいうか。四四六〇の「伊豆手の舟」との異同は不明。『令集解』（営繕令・古記）に船艇の代表に『播磨国風土記』逸文に見える伝説的丸木舟の名「速鳥」と並べて「難波伊豆之類」とも見える。

原文：佐吉母利能　保理江己芸豆流　伊豆手夫祢　加治登流間奈久　恋波思気家牟。右、九日大伴宿祢家持作之。（小島憲之他校注1996、p. 390）

305）伊豆手の舟→四三三六（伊豆手船）。歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる。（小島憲之他校注1996、p. 437頭注）

原文：保利江己具　伊豆手乃船乃　可治都久米　於等之婆多知奴　美乎波也美可母。（小島憲之他校注1996、p. 437）

306）小島憲之、木下正俊、東野治之1995b. p. 369の原文表記。

307）小島憲之、木下正俊、東野治之1995a. p. 121の原文表記。

308）小島憲之、木下正俊、東野治之1995a. p. 162の原文表記。

309）小島憲之他校注1995b、p. 369は、次のような頭注を付している。

浦廻漕ぐ―津々浦々を漕ぎ巡る、の意で、熊野船の特性を述べた修飾語。

熊野船着き―熊野船は熊野地方産の原木で製した船。その構造や機能に特色があった上に、その沿岸住民も航海技術に長じていたことで、当時、既に有名であったのであろう。巻第六の山部赤人の歌（九四四）にも「大和へ上るま熊野の船」が詠まれている。

原文：浦廻榜　熊野舟附　目頬志久　懸不思　月毛日毛無。（同上）

青木生子他校注1980、p. 390は、次のように注釈を付している。

熊野舟つき　「熊野舟」は良材を産する紀伊の熊野地方の舟で、特異な形状であったらしい。「つき」は形状の意で、目つき・顔つきの「つき」と同じものか。上二句は序。「めづらしく」を起す。

310）小島憲之他校注1995a、p. 121- p. 122は、次のような頭注を付している。

島隠り―この島隠ルは風待ちなどのために島陰に停泊すること。

ま熊野の船―マは接頭語。熊野は熊野船（三一七二）としてその構造・機能に特色がある船を産し、沿岸住民も航海技術が卓越していたことで、当時既に有名であった。

原文：嶋隠　吾榜来者　乏毳　倭辺上　真熊野之船。（同上 p. 121）

311）ま熊野の小船→九四四（ま熊野の船）。

原文：御食国　志麻乃海部有之　真熊野之　小船尓乗而　奥部榜所見。（小島憲之他校注1995a、p. 162）

312）小島憲之、木下正俊、東野治之1995b. p. 464の原文表記。

313）足柄小舟―足柄山で造った舟。「足柄山に船木伐り」（三九一）ともあった。逸文『相模国風土記』に、足柄山の杉材で造った舟は足が軽い、とある。
原文：母毛豆思麻　安之我良乎夫祢　安流吉於保美　目許曾可流良米　己許呂波毛倍杼。
（以上、小島憲之他校注、1995b、p.464）

314）「小船」が後人に正しく理解されていないことを知るには、「小（を）船」とはどのような船なのか、つまり、その具体的な大きさや乗員数等を考えるとよい。注303）で、歌の趣では、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤りではないものの、研究方法として許容されない、とは書いたが、歌や文章の趣が真にわかる人には、字面は「小船」だが実際には「小」さくなかろう、と感じられることがあるのではないか。

315）総称の「kau-nui、狩野」は広く使われていたようである。その痕跡は、船名にはないようであるが、地名に見ることができる。例えば、伊豆半島にある狩野を冠する地名は、茂在氏の挙げる例であるが（茂在寅男1984、p. 20）、他にも、例えば、巨濃郡（このぐん、鳥取県）、金浦（このうら、秋田県由利郡金浦）がある。さらに、神社に、籠神社（このじんじゃ、京都府宮津市大垣）がある。いずれも「kau-nui」との深いつながりで名付けられたものであろう。また、広島県福山市金江町（かなえちょう）は、江に金（属）があることに由来するのではなく、江に kau-nui（船-大きい）があることに由来していよう。金江町金見（かなみ）、金江町藁江（わらえ）、も、金（属）が見えるのではなく大型船（kau-nui）が見えるのであり、江に稲藁があるのではなく双胴船（waa-lua）があるのであろう。

316）地名には、その痕跡がある。例えば、田浦（たのうら、長崎県福江市）は、「tau-nui」との深いつながりで名付けられたものであろう。このような事例は、今後さらに追究するならば、無数に発見しうるに相違ない。

317）ありふれた言説であるが、言語は多重構造である。例えば、菊乃/菊野、雪乃/雪野、幸乃/幸野、綾乃/綾野、等の人名は、心理の深層では過去の言語習慣（慣習）に基づく一種の「慣習法」が支配しているのではないか、と思わせる例である。乃/野を付さない、菊、雪、幸、綾、等との意味の違いを人々が認識しているのか、認識できるのか、を考えるとよい。古代日本語とポリネシア語とのつながりを示す言語的痕跡ではあるが、今日まで受け継がれている例である。

401）原文・口語訳ともに、山口佳紀、神野志隆光1997（p. 142）。

402）荻原浅男、鴻巣隼雄1973の口語訳（pp. 149-150）。

403）原文・口語訳ともに、小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守1994、pp. 194-195。

404）『日本書紀』の「艇」は、洗練された言葉であり、異なる言語や文化を持つ集団にも理解してもらいやすいが、情報としては、『古事記』の「亀甲」の方が原情報を留めたものであり、古代人の言語に関する情報を伝えている点で、はるかに価値が高い。

405）触覚情報に、アン・サリバンがヘレン・ケラーの手に字を書いたことや点字がある。

406）Miguel Venegas、http://www.goldengateaudubon.org/birding/earlybirds/TheyCameBySea.htm.

407）小西友七・南出康世主編『ジーニアス英和大辞典』大修館書店2001. p. 2310。

408）鴿については、字面の助けもあり、大きな問題はないが、亀については、知識が継承されず、字面からの誤解も加わり、正確な意味を取ることができなかった。

409）Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 174.

410）Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 550.

501）隙間のない籠。「籠」はコとも訓むが、古訓のカタマによる。これは一書第一（一六三ページ）の「無目堅間（まなしかたま）を以ちて浮木（うけき）に為（つく）り」について、「所謂堅間は、是今の竹籠（たけのこ）なり」とみえ、カタマは竹籠（たけかご）の意である。……記に「无間（まなし）勝間（かつま）の小船」とあり、カツマの語形もある（小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p. 156頭注8）。
なお、この注に限ったことではないが、「竹籠（たけのこ）」を「竹籠（たけかご）」と言い換えたり考えたりしてはいけない。両者は、別物であり、「竹籠（たけのこ）」とは、「竹籠（たけのコ）」のことである（注514参照）。小島

憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏は、根拠を示すこともなく恣意的な言い換えをするべきではなかった。第３章『万葉集』の船名で、研究者は「こ」と呼ばれた船が存在した可能性がありそうだという認識を頭の片隅に置くとよい、と書いたが、古代日本語におけるコの存在が一日も早く認識されることを願うばかりである。

502）カタマは竹製の籠。カタマは「堅編（かたあま）」の意かという。カツマ・カタミとも。（小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994．p. 163頭注15）

503）マナシは「目無し」、カツマは竹籠で、カタマ・カタミともいう。固く編んですきまのない竹籠の意。神代紀には「無目籠（まなしかたま）」とある。西村真次は「无間勝間の小船」をベトナムの籃船と比較して、竹製の目を椰子油と牛の糞をこねた塗料でふさいだ船であるとし、また松本信広は竹製の目を漆で塡隙した船と解している。（荻原浅男他校注1973．p. 138頭注3）

504）「無間勝間」は、編んだ竹と竹との間が堅く締まって、隙間がない籠をいう。それを船として用いたのであり、船の形に作ったのではない。これを、潮路に乗せるのであり、漕いで行くわけではない。『書紀』にはこれを海に沈めるとあり、『記』とは異なっている点、注意される。（山口佳紀、神野志隆光1997．p. 126頭注4）

西宮一民1979．p. 98には、原文や現代語訳はないが、以下のような注釈がある。

「間なし」は隙間がない。「勝間」は「堅箕（かたみ）」で固く編んだ竹籠。隼人は竹細工を得意とした。竹は呪力ある植物で、この容器に籠っている間に異郷で新生するという龍宮女房譚と同型の説話である。

505）『日本書紀』（神代下、第十段、一書第一）には、竹を取って大目麁籠を作った、とあり、さらに、「是今之竹籠也」と付記する（小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994．p. 163頭注15）。

506）荻原浅男、鴻巣隼雄1973．p. 138の現代語訳。

507）山口佳紀、神野志隆光1997．p. 127の現代語訳。

508）三浦佑之2002．p. 109の現代語訳。以下の脚注も見える。

原文には「无間勝間（まなしかつま）の小船」とあり、カツマ（カタマとも）は竹籠の意だが、ここは、目のない（マナシ＝目無し）竹籠であり、海中に潜ることのできる潜水艦のような船をイメージしているのだろう。海底にあるワタツミの宮に行くための船である。昔話「浦島太郎」のように亀の背に乗って海底の龍宮城へ行ったら溺れてしまうはずだ。

509）小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994．p. 157と p. 163の現代語訳。

p. 163には、「無目籠」を指して、「目のつまった籠」という注釈も見える。

510）茂在寅男1984．pp. 3-4。

511）④饰以龙形的。如：龙勺；龙旗。亦借指饰以龙形之物。（罗竹风主编1993．p. 1459）

512）罗竹风主编1993．p. 1459。

513）牧鱼人、http://www.ds.zj.cninfo.net/haiyangwenhua/muyuren/gongjuyanbian/003.htm.

514）『日本書紀』の注釈の意味は、もうおわかりであろう。「竹籠（たけのこ）」とは、「竹の籠（kau）」である。注501）参照。

515）『古事記』は、「マなし」、『日本書紀』は、「まなし」である（後述）。

516）「目（ま）」は、音義融合とも取れる。現代中国語の例：引得（yǐndé）、インデックス。

517）無目籠之小船に、竹がどの程度用いられたかは、わからない。台湾の竹筏（てっぱい）は、今日見ることができるものであり、竹製のカタマラン（原義）で、船眼がなく、外洋航海にも耐える。アティリオ・クカーリ、エンツォ・アンジェルッチ『船の歴史事典』p.13（原書房、1985）参照。

518）カタマランという言葉は、古代から使用範囲が広いが、小論では、茂在氏の説くところに従う。なお、茂在氏は、この単語が奈良朝前期までに日本に入って来ていた、と考えている（茂在寅男1984．p. 44）。地名の痕跡も見ておきたい。志賀島（福岡市東区）は、博多湾の入口にある小さな島である。勝馬地区は、現在、田畑になっているが、かつては船が入れる入江であった。

カタマランが利用したことに由来するのであろう。

601）Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 50.

『竹取物語』は、当家の語部（集団）が代々口伝してきた音声情報（ハクワヒネ/カクワヒネ）を『記』『紀』が記録に残さないなら当家が残す、と発奮したことが創作動機だった可能性があるのではないか。音声情報が口伝の過程で劣化することはよく見られるが、「花」に聞こえる語句が直前になかったならば、コノハナノサクヤヒメはもう少し原音の痕跡を残す語形になっていたかも知れない（コノ○○ノカクワヒメ）。口伝の採集にあたって、語部（集団）をどのように選別/抽出したのか、解明が待たれる。

602）小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p. 152。

603）Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 55.

604）織り仕事の神の民間伝承の例に下記のようなものがある。

多くの地域では身近にあった稲藁を織り出しの数本（段）織り込んできた。しかし、織仕事をする者にあっては、あまりにも「当たり前」のことであり、筆者もそれらの動作や作業を中国少数民族の村々や日本各地の織場で見ていたが、それをうっかりと遣り過ごしてきた。だが、ベトナムのサパ県の苗の大麻布を織る女性も、貴州の苗の絹布を織る女性もその試糸に稲藁を織り込んでゆくのであった。あまりにも共通する稲藁の利用について留意し質問すると、多くは「昔からこうしている」というが、なかには「この稲藁を織りこむのを忘れると、織り作業の間に、タテ糸が何度も切れる」「神さまだ」と答える女性たちがいた。

そして、貴州省をともに訪れていた岡山県出身のＴさんが「私の記憶では、母も布の織り初めに稲藁を使っていました。そして、その藁が身近になかった大雨の夜に、織り出しは絶対に藁でと、わざわざ田んぼに取りに行った記憶があります」「母がいうには、これは神さま、木花開耶姫」と教えられたという。

井関和代「織り仕事の神さま「木花開耶姫」」。『BIOSTORY』vol.20. pp. 62-63. 誠文堂新光社 2013年。

605）コノハナノチルヒメは、「知流」では手も足も出ないから、文字表記にすがって何かしら適当に述べる者もさすがに何も述べないようだが、この人物には、子をもうけた事績があるくらいで、裏付けは取れないものの、言語情報に目を向けるならば、例えば、

kilo. 1. nvt. Stargazer, reader of omens, seer, astrologer, necromancer;

-hine. Female, feminine.

（Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 151 と p. 71）

がある（日本語のサ行音タ行音はハワイ語ではｋ音）。口伝に劣化は付き物であるが、この名前であるならば、この人物は、女性の占星家、天文学者、だったのであろう。

〔参考文献〕

〈日文〉

青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎1980。『萬葉集・三（新潮日本古典集成）』新潮社。

荻原浅男、鴻巣隼雄1973。『古事記　上代歌謡（日本古典文学全集１）』小学館。

小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994。『日本書紀①（新編 日本古典文学全集２）』小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之1995a。『萬葉集②（新編 日本古典文学全集７）』小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之1995b。『萬葉集③（新編 日本古典文学全集８）』小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之1996。『萬葉集④（新編 日本古典文学全集９）』小学館。

『大辭典』1994（覆刻版。1936初版）。平凡社。

寺川真知夫1980。「『仁徳記』の枯野伝承の形成」、土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編『日本古代論集』笠間書院。

西宮一民1979。『古事記（新潮日本古典集成）』新潮社。

日本国語大辞典刊行会　第二版　編集委員会、小学館国語辞典編集部2001。『日本国語大辞典　第二版』小学館。
三浦佑之2002。『口語訳　古事記［完全版］』文藝春秋。
茂在寅男1984。『歴史を運んだ船――神話・伝説の実証』東海大学出版会。
山口佳紀、神野志隆光1997。『古事記（新編 日本古典文学全集１）』小学館。
〈その他〉
羅竹風主編1993。『漢語大詞典』（第十二巻）、漢語大詞典出版社。
Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. *Hawaiian Dictionary*, University of Hawaii Press.

（こう　とうじ　中国学科）

2018年11月15日受理